

転生した憧れの世界はいろいろとおかしくなっていた（編集集中現在  
3話までは完了）

ありふれた猫の中の猫又

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリ主一条要が、原作ニセコイの世界に転生するはずがいろいろおかしいニセコイの世界に転生させられてしまう。おかしくなってしまうているニセコイの世界で要が苦勞人として頑張っていくお話です。

目次

ツギノヒ	33
アイビキ	24
ニセコイ	13
ヤクソク	8
ツウガク	4
テンセイ	1

## テンセイ

「ここはどこだ？」

確か俺は学校にいたはずなんだけど……見渡す限り綺麗な星？まるでプラネタリウムのような場所はなんだろう？地面見えないし。俺が立ってるからあるんだろうけど。俺がそんな事を考えつつ、辺りを見渡してぼーっとしてしていると目の前にサッカーボールくらいの大きさの光を放った球体がゆらゆらと飛んできた。そして俺の目の前で止まり、いきなり強い光を放った。

「うっ！なんだ！」

目を隠した手をどけると目の前には、その姿を見た人は誰もが美しいと言うだろう女の人が立っていた。

「はじめまして、こんにちは」

「こ、こんにちは。だ、だれ？」

「私は神です」

「え？今なんて？」

「神ですよ？」

「ええ！ホントですか!？」

「ええ、ホントですよ」

「すみません、神様とは知らずに無礼を……」

「いえいえ、大丈夫ですよ。そんなに畏まらなくて」

なんで自分の目の前に神様がいるのか大体予想はできてるが、何で自分がここにいるのか聞いてみようか。

「それはあなたが、亡くなってしまったからですよ」

「あ、やっぱりそうなんですって、なんで聞こえてるんですか!？」

「だってわたし神ですよ」

「あ、確かに、それで納得できる」

全部それでは片付けられるのは便利だな。さすが神って感じ（笑）てか、俺ってなんで死んだのか。

「あなたは、女の子を守って亡くなりましたよ。それはもうかつこよ

く散ってましたよ」

「女の子を？・そうなんですか？」

「あなたの記憶によると好きな人だったみたいですよ。その女の子をあなたは不審者から勇敢に守って亡くなりました」

「守ったですか。そんなに好きだったんですかね？」

「そうですね。今は生の世界と死の世界の狭間なので記憶の一部（亡くなったところ辺り）が消えているようなのでわからないと思います  
が、あなたは不審者が女の子をナイフで襲おうとしていたところを  
守ったみたいですね。ちなみにその後すぐに不審者は取り押さえら  
れたので女の子は生きていますよ」

「そうですね。それは良かったです」

記憶が曖昧だからわからないけど俺の命が無駄にならなくて良  
かった。

「で、ここからが本題なのです。あなたがこんな亡くなり方をしたの  
で、神の会議であなたに慈悲を与えようということになりました！」

「え？・慈悲ですか？」

「はい、そうですね！・なにか望みを叶えて差し上げますよ！」

「ええ！・いいんですか!？」

「はい。あなたが好きなライトノベルにありがちの異世界転生もでき  
ますよ。記憶付きで。もちろん同じ世界でまた生きたいならそちら  
でもいいですけど、こちらだと記憶はリセットされますが…」

「いえ！・転生をお願いします!!」

「そ、そうですね。わかりました。世界を決めることができますがど  
こか希望はありますか？」

「そうですねえ。あ！・ニセコイの世界ってありますかね？」

「もちろんありますよ！・主人公的立ち位置に転生させることもできま  
すが…」

「ぜひお願いします!!」

「やったあ！・これで前世にはなかった幸せなリア充ライフを遅れる  
!

「良かったですね。ですが、主人公的立ち位置だとしても黙っている

「だけでは何も起きませんよ」

「え？どういうことですか？」

「つまり、自分で努力して切り開いて行かなければ幸せなりア充ライフはやって来ないと言うことですよ」

「うっ、そ、そうなんですか。わ、わかりました。一生懸命頑張らせていただきます!!」

「はい、頑張ってくださいね。私はあなたの幸せを願っております。では、転生させますのでじっとしててください」

「わ、わかりました」

ついに、ついにこのときがきた。ああ、神様ありがとうございます。これから、一生懸命に二回目の人生を生き抜いていきたいと思いません。

「では、行きますよ」

足元から青白い光が溢れ出してくる。そして、自分を包み込むように広がってくる。

「神様。本当にありがとうございます！俺、頑張ります!!」

「ええ、お幸せに」

そして、夕陽は光に包まれてその場から消えていなくなった。そこには神様だけが残っていた。

「あ！一つ言い忘れてた！……まあいつか。これは生まれてからのサプライズってことで」

神様はまた光の球体になり、そのままゆらゆらと彼方へ消えていった。

## ツウガク

転生してからもう16年が経った。

俺はこの世界に来てからすぐにこの世界がニセコイの世界と少し異なっていることに気づいた。が、まず、その異なる事の前に俺の自己紹介をする。

一条要。これが俺のこの世界でつけられた名前だ。ニセコイ主人公一条楽の家、一条家の長男として生まれてきた、わけではない。俺は拾われた子である。たぶん神様がここに拾われるようにしてくれたんだろう。拾った子でありながら愛情を注いでくれた両親と姉に感謝だ。そして、俺は、小さい頃から前世での不甲斐ない自分を変えべく武道に打ち込んできた。今では極めるまではいかないがかなり上の段階まで上達している。前世の記憶があるためせこいが勉強も良くできる。さらに、神様がおまけでつけてくれたのか容姿も上の中の限りなく上に近いものだった。だが、ここからが問題だ。つまり、異なる事についてだ。

「みんなー、ご飯ができたよー!」

この声の主であり、俺の姉。その名は一条楽。一条家の長女である。前世の記憶では主人公で男のはずだった。なのに、見る限り黒髪ロングをポニーテールに結った綺麗なお姉さんになってしまっていたのだ。

「「姉御!おはようござーやす!」」

「ちよっと!姉御って言わないでっかっていってるとしよ!恥ずかしいからやめなさい!」

前世でもヤクザが好きではない楽は、この通りこの世界でも好きではないようだった。姉御ってちよっとヤクザ感あるから嫌なんだろう。

「あ!要おはよう!ご飯できてるよ」

「おはよう楽姉。いつもありがとう」

「どういたしましたー！」

楽は頬を朱に染めながら照れくさそうに笑顔で言う。うん、我が姉ながら可愛いな。

本当に面倒見のいいがお姉ちゃんって感じだ。性格は楽のまんまだからそこも関係していると思うが。

「二代目！おはようござーやす!!」

ちなみに二代目は俺。なんでかっていうと男が俺しかいないからだそう。なんとも適当だと思っただが、まあ悪くない。この慕われている感じ。そして、俺と楽姉に挨拶してた見るからに危ない雰囲気のかついで奴らは、ここ一条家の部下である。

「やれやれ、毎日元気だなー。おめえらは」

「組長!!おはようござーやす!!」

「おう親父。おはよう」

「お父さん、おはよう」

今出てきたのは、組長にして俺と楽姉の父親である。見た目は、少し鋭い目つきのおじいちゃんってところだな。

「ほらー!みんなご飯冷めちゃうよ!早く食べてー」

楽の作ったうまい飯が冷めてしまうのはもったいないとそれぞれがすぐに席につく。

「では、手を合わせてーいただきますー!」

「いただきますー!」

これが俺の家のいつもの光景。こんなちよつと変わった日常がさらに変わっていくことになるのを俺は、知っていた。

「そうだ、要。近えうちにてめえに大事な話があつから覚えときな」

「大事な話?」

「ああそうだ」

「ふーんって、やべえ!これじゃ遅刻しちゃう!」

この話は後でということ、要と楽は学校へ急ぐとする。が、ここで二人よりも早く竜が動く。

「なにい!そいつあいけねえ!!すぐにリムジン用意しろお!!」

「やめろお!お前ら!余計なことすんなあ!」



「兄貴!!これでいいですか!？」

「バカヤロウ!!15m級のに決まってるだろ!？」

「ひいひい!すいやせん!!」

「お前ら、俺の話を…」

リムジンで学校に行くというなんとも常識外れで恥ずかしい事を避けることは時間的に難しく、仕方なく乗ることにしたのだった。

—学校—

「では、二代目!姉御!今日も元気に行ってらっしゃいやせ!!」

「二行ってらっしゃいやせ!」

まあ、こうなるよね…。学校に遅刻せずについたのはいいのだから、周りから見れば、ガラの悪い男たち校門の前で二人の高校生に頭を下げているという異様な光景に見えるわけで居心地が悪い。周りからは恐怖の視線を浴びている。これが、楽の気持ちかあ。なかなか胸に来るな…。

「じゃあな、お前ら。気をつけて帰れよ」

「もちろんですよ!二代目!では!」

そう言っただけで帰っていった。

「はあ、勘弁してほしいわ。もうあんなの嫌よ!恥ずかしい」

「今度俺から竜に言っとくよ。だから楽姉怒んなって。可愛い顔がもったいないよ?」

「か、可愛いなんて…えへへ」

楽姉はこうして褒めると照れて喜ぶ。原作では、男だったあの楽がここまでの美少女になっっている。さらにめっちゃ可愛い。

「あ!私も今日日直だった!要!先言ってるね!!」

「おう。頑張った」

「うん。ありがと!」

楽は長い黒髪ポニーテールのしっぽをゆらゆらと揺らしながら校舎に向かっていった。

「はあ、それにして…ついにかあ」

原作では楽の学校生活が大きく変わる時期。それは、ある女の子が

登場することで始まる。

「そういえば、原作だとこんな感じの扉だったっけな」

要は、すぐ横にある扉の近くを通っていた。

「楽は確かここらへんで…」

要が、前世で見たニセコイを思い出していると、ドンツという音の次に自分に影が掛かったことがわかった。

「え!？」

「ちよーどいてえええ!」

なんと少女が扉の上から降ってきたのだ。だが、急なこととつさに要は、その少女を受け止めた。不可抗力でお姫様抱っこになってしまったが…

「おっと、危ねえじやねえか!気をつけろよ!他の人だったら大怪我させてたし、してたかもしれないだろ!」

「ご、ごめんなさい!」

要は、目の前の今、腕の中に収まっている金髪ロングの俺にはよくわからない髪型をしている透き通るような青い目の美少女に怒った。美少女は、びっくりしながらも自分のしたことを悪いと思っっているようだった。要は、美少女をおろし、

「今度からは気をつけろよ」

「ごめんなさい」

キーンコーンカーンコーン

ここで学校の門の閉まる合図の鐘がなった。

「あ!遅刻する!」

「え!?!」

「それじゃ!またな!」

「は、はい!」

そう言っつて要は校舎に走って入っつていった。

「またねか…。って私が遅刻しちゃうじゃない!」

原作を知っている人はわかると思うが、この出会いが主人公の生活を変えていくことになる。

## ヤクソク

—教室—

「おはよー」

「おっはー！要！」

「一条君おはよう」

教室に入りいつも通り挨拶を交わす。挨拶を返してくれたのは、一番が舞子集で後が小野寺小咲である。この二人は原作でも出てくる重要人物だ。集は、親友。小野寺は、好きな人という立ち位置だった。だがここで問題がある。それは、

「要！今日は髪型変えてみたんだけどどうかな？似合ってる？可愛い？」

この発言、小野寺が言っていると思った人がほとんどだろう。だが、答えは集だ。別に集がオネエというではない。ではなぜかという、それは集が女になってしまったているからだ。見た目は、茶髪のショートヘアでメガネを掛けている可愛い系女子だ。例えるなら俺ガールの蝦○さんみたいな感じだ。知らない人、ごめん。ちなみに小野寺は原作通りで黒に近いの茶髪のショートヘアの美少女だ。

「ああ、似合ってるよ」

「ほんとー！いやー嬉しいねえ。これで要も私にメロメロかな？なんてね！テヘペロ★」

ニヤニヤしながら舌を出し集が言う。

「ならん」

「えくなんだよおくつれないなあ」

「あの…い…一条君！」

「ん、何？」

「手から血が出てるよ？大丈夫？」

今度は小野寺が心配そうに聞いてきた。さつき金髪美少女をキヤッチしたときに切ってしまったっていたようだ。

「わ…私、絆創膏持ってるから使って！」

「いやいいよ小野寺。放つとけは治るし」

「だ…だめだよ！バイ菌入ったらどうするの？ほら！」

小野寺は要の手を握り丁寧に絆創膏を貼った。手を可愛い女の子に握られているのはちよつと、いやめつちやドキドキする。

「あ…ありがと」

「う…うん。どういたしまして」

要は貼られたことに、小野寺は貼ったことに照れていた。

ガラガラツ

「あー！要と小咲ちゃんがイチャイチャしてる！」

ここで日直の仕事を終えて教室に入ってきた楽姉が教室に入ってきた。ちなみに楽姉は姉だか同学年で同じクラスだ。楽姉はこちらに走ってきてそのまま要に抱きついた。

「小咲ちゃん…要の独り占めはだめだよ？」

「え…ええ」

プンプンとあざとく頬を膨らませて可愛い楽姉と楽姉の勢いと言葉にあたふたしている可愛い小野寺。可愛いのはいいのだから…

「また始まったよ…」

「楽ちゃんは相変わらずブラコンだねえ」

「くそつ…う…羨ましいぞ！要！」

そんな声がクラス中から聞こえてくる。やはりこの声にはなれないな。正直恥ずかしい。ラブコメ主人公の気持ちがこのときばかりはよくわかる。

「おまえらー。朝から恋愛ドラマみたいな修羅場繰り広げるとこ悪いがホームルーム始めるから席につけー」

「「ハーイ」」

担任のキョーコ先生が入ってきたのでみんなが席に座る。

「よーし、今日は転校生を紹介する。どうぞー、桐崎さん」

「はいー」

先生がそう言うのと廊下から金髪美少女が教卓のところまで歩いてきた。

「初めまして！アメリカから転校してきた桐崎千棘です。母が日本人

で父がアメリカ人のハーフですが、日本語はこの通りバツチリです。みなさん気さくに接してくださいね！」

金髪美少女変わり千棘はニコツとした。

「うおおおおお！かわいいー！」

「すっげー美人!!」

「足細ーい!!何あのスタイルくー!!」

「ハーフだってよー!あんなかわいい子見たことねえよ!」

「ちとげちゃん!結婚してー!!」

クラス中が大騒ぎになる。まあ、当然といえばそうだろう。金髪で青い目、スタイル抜群で日本人顔の美少女であるから仕方ないことだ。俺は、原作を知っていたから驚いていないだけで普通はこんな美少女が来たらビビる。

「静まれー。じゃー、ひとまずテキストに後ろの空いている席に……ん、一条弟!お前の席の隣っていないよな?」

「はい、いいですよ」

「じゃあとりあえず、桐崎さんはあそこの席に座ってくれ。一条弟!桐崎さんの面倒頼むぞ」

「わかりました」

千棘が少し恥ずかしがりながら俺の隣の席に座る。

「お、同じクラスだったんだ。さつきはごめんさない」

「もういいよ。それより、これからよろしく桐崎さん」

「うん!よろしくね!一条君!」

なんか原作の印象よりちよつと柔らかいような気がするな。本来の千棘は、殴る蹴る当たり前だったし口も悪かったはずだ。まだ猫被ってるかもしれないな。まあ、それは後々でいいか。

「桐崎さん、よかつたら後で校内案内するよ?」

「え?いいの!?ありがとう!お願いするね!」

とりあえずキョーコちゃんには任されたからにはしつかりと面倒見ようかな。小野寺と楽姉が何やらこつちを意味深な目で見ていたが今は気にしないでおこつ。

—放課後—

俺は、桐崎さんに学校の中を案内していた。今日の一日は、桐崎さんが日本の字にまだなれていないようだったので手伝って上げたり、他の人たちから桐崎さんの事を近いからという理由でいろいろと聞かれて結構疲れた。そして今は、校舎の案内をしている。

「えくと、ここで最後かな？」

「うわあ、綺麗…」

二人は屋上に着いた。校内を案内していたが、ここで最後になる。千棘が屋上からの景色に夕焼けもあってか「綺麗」と感動していた。だが、ふと千棘は何か考えるような表情になって屋上からの景色を見つめながら黙ってしまった。

「桐崎さん？どうかした？」

そう要が聞くと千棘は、こちらを振り向き、目を合わせ、何かを決心したような顔をしていた。

「あのね、聞きたいことがあるんだけど…いいかな？」

「う、うん」

千棘はそう話すと急に、もじもじして顔を赤く染めながら首元からネックレスに付いている鍵を要に見えるようにしてを聞いてきた。

「い…一条君はさ…この鍵に見覚えないかな？」

「ある…」

そう、見覚えはある。なぜならその鍵は、俺とみんなの十年前の約束の証なのだから。記憶は曖昧だが、強制的に約束をさせられた事は覚えてる。

確か俺の記憶では…、

俺は、家族で旅行に行っていた。まあ、旅行といっても親父と他のヤクザやギャングが話をするためだったらしいが。一条家はヤクザであるが、そんなに悪行をしているわけではないようだ。まあ、その時に仲良くなった女の子達がいたことを名前まではいかないが覚

えている。そして、そのときに約束をして証を作った。俺は錠で他の女の子達は錠で再開したら開けると約束をして。そして、千棘が持っている錠はその一つである。つまり、あの場にいた女の子の一人というわけである。

そして、今に至る。

「あ…あるの！そそそれじゃあ約束は!？」

「いやあ、その約束があんまり覚えてなくてさ」

すると千棘がすごく悲しそうな顔をしていた。それは友達に裏切られたヒロインのような顔だった。

なんだろう。すっげえ罪悪感。こんな千棘見てらんないよ。どうしよう。

「そ…そつか。忘れちゃったんだ…」

「ごめん…。あのさ、桐崎さんはあのときあの場所にいたってことだよね?。」

「そうだよ。あのとき、みんなで約束したことも覚えてる。でも一条君は忘れちゃったんだね」

このとき、桐崎さんの目からは雫が落ちていた。泣いていたのだ。「私なんて泣いてるんだろ…、ごめん!」

桐崎さんはそのまま走って帰って行ってしまった。取り残された要はどうして忘れてしまったんだと自分を攻めることしかできなかった。

## ニセコイ

—一条家—

あれから一週間たった。千棘とは、あの屋上を案内した日から少し気まづくなっている。俺は覚えていなかった罪悪感で話しかけれずにいた。

「おい。要、入るぞ」

急に部屋の襖を空けて親父が入ってきた。

「んあ、親父か。なんか用か?」

「ああ。この前、てめえに大事な話があるって言ったなあ。覚えてるか?」

「あく覚えてるよ」

「そうか。ちよいと俺の部屋に来な」

要はそのまま親父についていく。そして親父の部屋に着く。

「それで話なんだが…」

親父は真剣な顔になった。

「最近な、俺らの縄張りにギャングが入って来てな。今それと抗争になってんだ。それがな、いよいよ全面戦争になりそうなのよ」

「へ〜……は?!?!」

「ここからが本題だ」

ギャングとの抗争の話を聞いて要は今から起きることを思い出した。桐崎さんのことで頭がいっぱいだった要はすっかりこれから起こることを考えていなかった。

「ああ!?! そうだった!」

「ん? どうした?」

「え? あ、いやこつちの話」

「そうか? ……まあいい。それでだ、本題なんだが…要。恋人とか好きな人はいんのか?」

「いや、いねえけど。急になんだよ」

「いや、いねえならいいんだ。都合がいい」

「そうかよ。で、なんだよ」



「この戦争を回避する方法が一つだけあってな。しかもてめえにしかできねえことだ。これは楽にはできねえ」

「実はギャングのボスとは古い仲でな。奴にも、おめえと同一年の娘がいるらしいんだが…そこで要。おめえ、その子と恋人同士になつてくれねえか？」

「ああ、やつぱり」

「なんか言ったか？」

「いやあ、なんも」

「そうか？まあ恋人ついてもフリだけでいいんだ。お互い組の二代目が恋仲とあつちや若え連中も水差すわけにやいかねえだろ？」

「まあそうだな…」

「悪いがこつちも命かかってんでな。泣き言言つてもやつてもらうぜ？」

「わ、わかった」

「それじゃあ、こつち来い」

要はドキドキしながら親父の隣の部屋に移動した。原作の展開とこのことでワクワクしていた。ただ、要はまたもあることを忘れていた。

「だからまだやるって決めたわけじゃ…」

「でも彼、なかなかイケメンらしいよ？」

「え？いやいやでも、私には要君が…」

「要、この子がお前の恋人になる…」

親父が仕切りになつていたカーテンを開けた。

「桐崎千棘お嬢ちゃんだ」

「あっ」

忘れてた〜!!桐崎さんが相手なの忘れてた〜!!

要はギャング・ビーハイブの娘が桐崎千棘だと言うことを忘れてたのだ。

「そして、こいつがギャング組織ビーハイブのボスであり、お嬢ちゃんのお父親のアーデルト・桐崎・ウオグナーだ」

「アーデルトと呼んでくれ」

「ど、どうも、一条要です。よろしくお願いします。アーデルトさん」  
「そして急だが、お前ら二人には明日から3年間恋人同士になってもらう」

「さ、3年間!？」

桐崎さんは、目の前の要と恋人のフリを三年間することに、原作うる覚えの要は、予想以上の期間の長さにびっくりしていた。

「か、か、要君がこ、恋人になるの!？パ、パパ!!なんで教えてくれなかったの!要君が恋人になるなら私…」

千棘はそこで自分がなにを言おうとしていたかを考え赤面する。親父たちはニヤニヤしながらこちらを見ていた。

「何だおめえら、もうそういう関係なのか?そういえばガキの頃に遊ばせたことがあったな」

「そういえばそうだったねえ。ならこのままゴールインもあるかもしれないねえ」

「いや小さい頃はそんなこと言ってけど、まだそんな関係じゃないから!」

親父たちのからかいに俺が答えると、うっかり過去を覚えているわかる言葉を放ってしまった。それを聞いて千棘が驚愕の表情を浮かべたあと怒りの表情に変わり…

「か・な・め・くん?」

千棘が要の肩を女の子とは思えない握力で掴みながら笑顔でそこにいた。後ろには鬼が見える。

「ねえ、要君?あの時、覚えてないって言ってたよねえ?」

「ひっ!い、いや…あの…はい」

やばい!これはやばい!!あの原作でゴリラ女と言われていた怪力で千棘に殴られる!!!

「う………」

ん?

「うっ………」

あれ?

「うっ……ぐすっ」

あれあれ？

「がなめぐうん！」

あれええええええ！?

急に千棘が大泣きして要に抱きついた。要は千棘に殴られると思  
い構えていたが予想外の展開に呆然としながらも千棘を受け止めた。

「おぼえでぐれでよがっだよお」

「え？なんで？」

要は千棘に抱きしめられながらなぜこうなっているのか理解が追  
いついていなかった。ただ、思った以上に千棘が可愛かったのはたし  
かだ。

「そうかあ、これが原因だったのかあ」

「え？」

千棘の父のアーデルトさんニヤニヤしながら言う。

「いやあ、ここ数日の千棘の様子がおかしくてねえ。元気がないから  
何かあったのかと思って心配してたんだよねえ」

「そつ、そうだったんですか。なんかすみません」

「いや、いいんだ。こうしてわかったわけだし、千棘も喜んでくれてい  
ることだしね。ただし、」

「ひっ！」

アーデルトさんは、さつきまでニヤニヤしていたが急に後ろに鬼が  
見えた。顔はすぐくニコニコしているのに。怖い笑顔と言うやつだ。

「今度千棘を悲しませたらただじゃおかないよ？」

「は、はい！！すいませんでした!!」

親父はニヤニヤしながらこちらを眺めていた。アーデルトさんは  
親父の方に行き世間話なのかわからないが会話を始めた。

俺、この状況どうしたらいいんだろう。千棘がもう離さないとばか  
りに俺を抱きしめて泣いて顔を俺の胸に埋めている。とりあえず泣  
きやむまで待つしかないか。

「うつ…うつ…ぐすつ」

「落ち着いたか？」

「…うん…ウソツキっ」

「…ごめん」

「なんで？なんであんな嘘ついたの？」

「そ、それは…」

どうしよう。ここは正直にいうべきなんだろうか。悲しんでしま  
うんじゃないだろうか。でも…ここまで思ってくれている人にもう  
嘘は付きたくないな。

「桐崎さん。小さい頃の約束、覚えてる？」

「うん、みんなで結婚しようって約束でしょ？」

「そう、俺はそれが嫌だったんだ」

「え？なんで？」

千棘は驚きの表情で俺に理由を求めてきた。重婚が普通であるこ  
の世の中ではそれが嫌だと言う方が珍しいからだ。

「俺は、一人の人を愛したいんだ。一人の人と幸せな人生を送りたい  
と思っっているんだ」

「そ、そんな…したらみんなでの約束が」

「確かに約束を破ることになる。でも俺はそうありたいんだ」

「……」

千棘は要の言葉を聞いてからしばらく黙ったままだった。だが急  
に真剣な目になって、なにかを決心して要に話した。

「な、なら！私が要君の一番になる！」

「え？」

「私！要君のこと大好きだから!!」

「ええええええええええ！」

なんでこうなった？俺はここで諦められると思っていたのに。ど  
うしよう。実を言うと俺は姉キャラのほうが好きなんだよね。一応  
言っておくが、楽姉はちがうぞ。

すると、親父がニヤニヤしながら…

「なんかてめえらで仲良く話しているところすまねえが、恋人のフリ

はするってことでいいんだな?」

「ああ」

「やります!」

「それでいいんだ。じゃねえと大変なことに…」

ドツガアアアアン!!

親父が言葉を言い切る前にそれは起きた。なんと、部屋の壁が破壊されたのだ。そして、

「お嬢—————!!」

「いまかよ!」

これは、原作展開である次のイベント。ビーハイブの若い奴らが一条家に突撃してくる展開だ。まさかこのタイミングで来るとは思わなかった。

「…見つけましたよ、お嬢…」

そして、綺麗な銀髪を伸ばした誰もが見とれてしまう美女が先頭に立っていた。

「集英組のクソ共が、お嬢をさらったと言うのは本当にだったようですよね…」

「クロード!!」

銀髪の美女、クロードの登場に千棘が驚いていた。俺は、やはりかと思いつつながら驚愕していた。なぜなら、原作でクロードは男だからだ。原作ではビーハイブの大幹部でイケメンの千棘のお世話役のようなキャラで、かなり重要なキャラだったからもしやと思っていたが……ビンゴ。まさか、こんなになっっているなんて。腰まである髪は透き通るようなの銀色で、顔はものすごく整っている。一言で言ったら、美女だ。一応言つとくと…若い連中も女が多い。

「ご安心くださいお嬢…、お嬢を守るのがビーハイブ幹部としての私の役目…、不肖このクロードめがお迎えにあがりました」

クロードは、素敵な笑顔で笑ってみせた。いま一瞬花見えたな笑「い、いや、クロード!?私さらわれてないから!」

千棘がクロードの誤解を訂正しようとしていると、集英組の連中が駆けつけてきた。

「大丈夫ですか組長ー!!!」

「なんじやあ今のは!」

「あ!こいつらビーハイブ!!」

ああああめんどくせえのが来たなあ。これは、いよいよ危なくなってきたな。

「おうおう、ビーハイブの大幹部さんよお。こいつあちよいとお痛が過ぎやしやせんかあ…。今まであ手加減してやったけんどのお…。今度という今度は許さへんぞ!!」

竜がいかにもヤクザって感じの顔で怒っていた。

「ふん…猿共が…。お嬢に手を出したらどうなるかおしえてやる」  
竜の言葉にクロードも負けじと挑発をする。

「この街ごと消し飛ばしてやろうか…。ついでに貴様らの跡取りもバラして売りさばいてやる…!!」

「怖えー」

「やってみいやゴルア…、二代目に手エ出したら、ビーハイブに関わるもん全て二度とお里の土踏めんようにしたらあ!」

「えっえええええええ!」

クロードの言葉に要が、竜の言葉に千棘が驚いている。すると、親父達が…

「あー、君君。ちよつと誤解してるんじやないかね嬢ちゃん」

「ん?なっ!?!ボ、ボス!!」

親父の方を見たクロードは自分のボスが、いることに驚愕した。

「嬢ちゃんをさらったなんざとんでえもねえ。なんせ…」

「こいつらあラブラブの恋人同士だからね(な)！」

「な(え)!!」

親父達がついに恋人事を振りやがった。こうなったらもう一旦結婚のことは保留にして彼氏を演じ切るしかない!

「「「な!なあああにいい!!」」」

うちもビーハイブの輩もみんな驚愕していた。そして、

「ボス…本当ですか?」

「ああ、僕らが認めた仲だ」

「……そ……」

やばいな。若いもんが文句言ってくるかも知れない。何か認めてもらえることを考えろ！

「『そりやすげー!!!』」

「はえ?」

竜とクロード達は一齐に喜んだ。予想外の展開に俺と千棘は呆然としていた。

「いやーずっと心配だったんすよお!この歳にもなって彼女の一人も出来ねえから……」

「いやー、こいつは本当にめでてえ!」

竜と他の奴らが俺を祝福してきた。ウチの奴らは賛成のようだ。千棘のほうは……

「お嬢……」

「は……はい?」

今まで急に事が進みすぎて混乱していた千棘がクロードに呼ばれて変な声で返事をする。すると、急にクロードが泣き出した。

「ええー!」

「いつの間にかお嬢もそんなお歳になられていたのですね……。幼少より見守ってきたお嬢が立派なレディに成長なされた……。これを喜ばずして何がお嬢のクロードでしょう……」

「い……いや、私のにした覚えはないんだけど……」

クロードの発言に戸惑いつつつツツコミを入れる千棘。千棘の方も賛成のようだった。

「そういうことなら話は別できあ!坊っちゃんのためならこんな紛争すぐにでも手を引きやすぜ!!」

「我々も同じです!お嬢が安心して交際できるよう全力でサポートしましょう!!」

なんか知らんこれまた原作通りに紛争をやめてくれることになったようだ。良かった良かった。原作では楽がここで千棘を「ゴリラ女」と言い、千棘が楽を「もやし男」と言ってしまう危なくなるのだが、俺はバカではないし千棘をゴリラ女とは思っていないのでそんな

ことはしない。

「一つ、いいだろうか？」

「なんですか？」

クロードが俺に質問してきた。ん？こんなのは原作にはなかったなあ。

「一条要。キサマはお嬢を守れるのか？」

「え？」

「キサマにお嬢を守れるだけの力があるかと聞いているんだ」

「んー、どうだろう？わかんないですね」

クロードとよくわからない質問をしてきたのでテキトーに返す。

「なに!?そんな曖昧なことでお嬢を守れると思っっているのか!!」

「うわ!すいません」

クロードが美女には似つかない顔で怒鳴り散らした。ここで俺は、自分がテキトーに答えていたことを反省した。大事な人をこのように扱われたら誰でも怒ると思ったからだ。

「一条要!なら私と勝負しろ!」

「ええ!やつぱそうなります!」

「私がお前の力量をみてやる!」

このやり取りを見ている竜が止めようとしていたが要の親父に止められた。親父は、

「要のやつは心配ねえよ、逆に相手を心配してえくらいだ」

と、笑っている。竜は、

「そりゃあ坊っちゃんが強えですが…」

だが親父は、

「まあ黙ってみてな」

と言った。

なぜ要がここまで心配されていないのか。なにもクロードが弱いわけではない。一応ビーハイブの幹部をやっているだけあって腕は確かだろう。では何か…、それは、武道だ。一話でも言ったが、要は前世での反省をいかし、日々武道に打ち込んできたのだ。今ではインターハイのトップの注目選手になっているほどだ。つまり、やばいく



らい強いのだ。

「では、行くぞ！」

「ちよ、ちよつとまって」

要の静止も聞かずクロードは要に一気に接近し、拳を突き出してくる。要はそれを状態を反らすだけで避ける。二発目、三発目と何度もクロードは拳を突き出すが、全て要に簡単に避けられてしまう。クロードはイライラしながら…

「おい！どうした！そんなに避けてばかりではお嬢を守れはしないぞ！」

「待ってっていったじゃないですか！あと、俺は女の人を殴る趣味はないんですよ！」

要は原作通りのクロードだったら男だったので殴っていたかもしれないが、この世界のクロードは美人なお姉さんである。そんな人を殴る事は要にはできなかった。

「なにを甘ったれたことを言っている!!ならばこうだ！」

クロードは想像以上の要の回避能力に驚愕し、苛ついたのか蹴りを使い始めた。さらに木刀も。

「うわっ！武器は危ないって!!」

「だまれ！お前のような腰抜けはここで成敗してくれる！」

要はどうしたもんかと考え、一つさっきの殴る趣味はないに反するが…方法を思いついた。それは…

「よし！わかった。クロード！やってやる！かかってこい！」

「のぞむところだ！」

クロードが要に再び接近して拳を突き出すが、要はそれを受け流しクロードの後に回った。そして、クロードのうなじを手刀でヒットさせた。クロードは膝から力なく崩れ落ちた。気絶したのだ。

「ふう…」

「幹部が負けた…」

「うそでしょ…」

クロードの部下が口々に言う。

「やっぱ坊っちゃんは強いっすねえ！」

「そうだな」

要の親父と竜は予想をしていたが、要の研ぎ澄まされた身のこなしに驚愕し、歓喜していた。千棘は何が起きたかわからず再び呆然としていた。

## アイビキ

—次の日—

今日は土曜日。

要は、家での騒動が終わって、これからどうしていいこうかと布団に寝転がりながら考えていた。

ついに、偽の恋人をすることになったけど恋人ってそもそもどうするかわからねえし。一応、家の奴らもビーハイブの奴らも騙せたけど……クロードに原作と違う意味で目をつけられてそうだなんだよな（自分を倒した憎いやつ的な意味で）。まあ、それはそうとして、これからどうなるんだっけか？ここ何十年とこっちで過ごしてきたから、今までの展開は読めたけどそろそろわからなくなってきた。

要がそんなことを考えていると…

ピンポン

「ん？誰か来たのか？」

要が自分には関係ないと思っていると、

「坊っちゃーん！お客さんですぜー!!」

「俺に客？」

竜がテンション高めの声で俺を呼んでいる。客？誰か呼んでたっけ？

要は、自分の今と前世のニセコイの記憶をたどる。すると、

「あーあれか!？」

要はあることを思い出し、急いで玄関に向かった。

「坊っちゃん、おはようござーやす。お客さんですぜー」

玄関には、ニヤニヤした竜が待っていた。そして玄関の外を見るとそこには、

「おはよう、要君……」

そこには、おしやれした千棘とクロードが立っていた。千棘は顔を

真っ赤にしている。実を言うところの状況は、ニセコイ原作でもある展開だ。集英組での騒動の次の日、楽と千棘が無理矢理デートをさせられるというものだ。まあ俺は嫌ではないが、とりあえず知らされてないことだからな。知らないふりをおこそう。

「おはよう桐崎さん。今日はどうしたの？」

「あ、あの……要君。今日なんだけど……デ……デートしない？」

千棘がもじもじしながらデートのお誘いを言ってきた。

まじか、千棘可愛いな！

「きよ、今日は予定もないし、いいよ……」

「ほ、ほんと！ありがと！」

そのキラキラした笑顔は反則です。よし、落ち着け俺。それはさておき、さつきからめつちや千棘の横にいるクロードが睨んでくるんだがなんだ？やっぱ昨日のことか？

「お嬢がどうしても集英組の坊っちゃんをデートをしたいというのでお連れしたまでだ！」

「いや、そんなこと急に言われても……」

クロードが要の視線に気づいたのか話しだした。

クロード絶対根に持つてるな。キサマは認めないとか言いそうな顔してるし。美人なのに勿体無いな。

「んじや、俺は着替えてくるな」

「うん！じゃあ、私は外で待つてるから」

「ん？いや、中に入って待つててくれていいぞ」

要の言葉に千棘は、

「あ、うん。じゃあお言葉に甘えて。クロード達は帰っていいわよ」

「ですがお嬢！」

「大丈夫だから！ほら！帰って帰って」

千棘はクロードが邪魔みたいだな。まあ、何かと口を挟んでくるやつは俺も嫌だと思う。うん。

そんなこんなでデート（千棘）の始まり始まり。

千棘と要はとりあえずデートといえば映画と思い、駅前の映画館で映画を見ることにした。今は映画館の前でなにを見るか悩んでいるところだ。それにしても、

「いるな…」

「要君どうしたの?」

「ん? いや、なんでもないよ」

「どうやら俺たちにビーハイブと集英組の奴らがついてきたようだった。まあ、俺らの場合対して問題にはならないので好きにさせようかな。」

「桐崎さんはさ、好きな映画とかある?」

「……」

「ん? どうしたの?」

「え? い、いや! なんでもないよ! れ、恋愛映画とか?」

「へ、へー。俺はてつきりアクション映画が好きかと思ってたよ」

「要が、原作では千棘がアクション映画が大好きだったことを思い出した上での質問である。」

「え!?! アクション映画は好きだけど要君とは恋愛映画が見たいかなーって思ってた」

「あ、やっぱ好きなのね笑。てか、そんなふうに思われていたのか。なんか恥ずかしいな。」

「んー。じゃあこれなんかどうだ?」

「ん! あ、いいね! これ見てみたかったんだ!」

「よし、じゃあこれにしよう!」

—映画終了—

「はあ、いい話だったな。久々に映画でうるつときた気がするなく。千棘はどうだった? ん?」

「うつ…ぐつ…」

「あら、千棘さん感動して泣いてらっしやる。なんか、前から思ってたけど、この世界の千棘は俺の知っている原作の千棘とかなりの違うのかも知れない。これは、原作の知識に頼りすぎるのは危険かもしれない」

ないと思う。これから気をつけていかないといけないな…

千棘はしばらくして泣き止んで、「すごくいい話だった!」と、笑顔で言った。

やばい…

「この笑顔、一億円。いや、足りないかも…」

「要君?どうしたの?」

「い、いや、なんでもない」

要は興奮した気持ちを抑えつつ、次の目的地に千棘と一緒に向かった。

—レストラン—

「桐崎さん、ここで昼食を食べようか」

「うん、いいけど…」

千棘が映画の前から少し様子がおかしい気がする。なにかを気にしているような感じがする。

「ん?他のとこがいい?」

「いや!ちがうの!ここでいいんだけど…」

「?」

「要君」

「うん」

「私の事、昔みたいに千棘って呼んでほしいなくなんて…どうかな?」

「なんだ〜そんなことか」

そういえば、昔はそんなふうに呼んでたっけか。すっかり忘れてたわ。でも急に言われると恥ずかしくなるもんだな。

「だ、だめかな?」

要が考えていると千棘が悲しそうな顔で聞いてきた。

そんな顔で見られたら断れないよ。てか、断る理由なくね?

「桐崎さんが良ければそう呼ばせもらうよ」

俺がそう言うと、千棘の顔が悲しそうな顔から一変して、喜びに満ちた笑顔になった。

「あ、ありがとう!」

「お礼をいわれるほどじゃないだろ。まず、拒否する理由がないし。まあ、改めてよろしくな。千棘」

「う、うん。よろしく。要君」

「千棘も俺の事も要で」

「あーそ、そうだよねー！じゃ、じゃあか…要」

「おお！何という攻撃力！名前呼びがここまで強力だったとは、やばい。照れる。」

「あ、ああ！よ、よろしくな！そろそろご飯食べようか！」

「そうだね！」

お互いの名前を呼んだことで恥ずかしくなり、その後はお互いを気にしてチラチラ見ながら無言の食事が続く二人であった。

カフェで食事をした二人は、特にやることなくだったのでデートの定番の公園に来ていた。いつもはカップルがそこらへんにチラほら見えるのだが、今日はそんなにいないようだった。

二人は、カフェでの事は落ち着いたようでベンチに座って談笑していた。お互いの組のことやこれからの学校生活のことなどだ。ときおり見せる千棘の笑顔が可愛い。このままホントにゴールインなんてこともありかもな…

「あ、あのね、要。私ちよっとお花を積んでくるね」

「ん？いきなりどうした？花なら逆方向だぞ？」

「もう。女の子がお花を積むって言ったらトイレのことだよ」

「あ！そういうことか！」

「デリカシーないよ！要！」

「ごめんごめん」

俺は苦笑しながら答える。千棘はわざとらしく頬を膨らませて怒った真似をしているようだ。

千棘は行ってくると言って近くのトイレに走って行った。

「ふう〜」

千棘、可愛いなく。あんなの笑顔見せられたら誰でも心が揺らぐよ

なく。原作ではあんなに暴力的で口の悪い子だったのに、これじゃあまるで別人だな。完璧になってる。だが、まだ決められないんだよな。これからもたくさんの女の子が出てくるはずだし、俺、原作だと押しキアラ鷓だし。千棘がこんな感じだからなんか変わってるかもしれないしな。

そんなことを要が考えていると、そこに二つの影が近づいてきていた。当然要は気づきその影の方向を見る。

「うあー！」

「ば、ばれたー！」

要が見た先には、楽姉と小野寺がいた。気づかれていないと思っていたようで、急に要が振り向いたことにびっくりしているようだった。

「あ…楽姉と小野寺か。ようー！」

「うん。で、要はこんなところで一人はなしてるの?」

楽姉が俺に聞いてきたので、

「うん?一人でじゃないよ。デートだよ。いま待ってるの」

「え!」

俺がそう答えたとき、二人が驚いていた。

「ん?」

「要?いま、デートっていった?」

「え?うん。そ、そういったけど…え?」

なんで、二人の顔が笑顔なのに目が笑ってないんだけど。ついでに言えば、背後に鬼が見えるよ。

「要君?デートって誰と?ねえ誰としてるの?」

「ひいー」

え?小野寺?この人小野寺?スゲエ怖いんだけど!目が笑ってないよ。それ人を殺す目じゃないよね。

「早く答えて!!」

「え…えーと…」

「要!お待たせ…え?」

楽姉と小野寺が戻ってきた千棘をものすごい形相で睨む。



「ひい！」

千棘も俺同様にこの二人の迫力に怯える。だが、千棘を見た楽姉と小野寺が急にさっきの怖さが一変して笑顔になった。

「なんだ。千棘ちゃんだったのか。なら早く行ってよく。びっくりしたじゃん」

「そうだよ要君。千棘ちゃんなら大丈夫だね」

ん？どういうことだ？なんでさっきまで怒ってたのに急に穏やかな雰囲気になってるんだ？

要が頭に？を浮かべていると楽姉が、

「要？どうしたの？」

「え、いや…急に変わったから…」

「あくあのね、要にはまだ言ってなかったことがあるの。実は、要と結婚するって約束した子達で約束したことがあるのよ」

「へ？」

「二つ目は、要を独占しすぎないこと。二つ目は、デートとかをするときは事前にみんなに連絡すること。そして最後が、要をずっと好きでいること」

「はい？」

「だから、今回の千棘ちゃんの行動はちよつと問題あるんだよねえ？ね、千棘ちゃん？」

約束を言い終わった楽姉の顔は再び笑顔なのに目が笑っていない。怖っ、てか、そんな約束してたの？全然知らなかったわ。俺の知らないところでこんなにもことが進んでいたのか。てか、俺の希望は？

俺の希望は通らないのですか？

「千棘ちゃん？あとでみんなでお話があるからね。場所は、千棘ちゃんの家でいいかな」

「……」

「じゃあ、私みんなに連絡するね」

楽姉と小野寺が千棘になにかするようだ。さっきから千棘がガタガタ震えてるんだけど…大丈夫か？ここはデートの相手として助け舟を出してあげよう。

「あのさ…千棘も悪気なあったわけじゃないんだからさ…」

「ん？」

「ひいー」

俺が千棘を庇おうとしたら楽姉と小野寺が笑顔で振り向いた。ただ、目は一切笑ってなどいない。だが…

「はあ」

「千棘ちゃん、要君がいて良かったね」

さつきまでの怖かった二人の笑顔が呆れ顔に変わった。

「仕方ないなく今回は要に免じて許してあげる」

「そうだね」

「は、はあ…」

「まじか」

「ただし！今度やったら千棘ちゃん？わかるよね？」

「ね、千棘ちゃん？」

千棘は楽姉と小野寺の言葉を聞き、体を身震いさせた。

楽姉と小野寺はそう言っ、俺に今度は誰もが認めるような笑顔で「バイバイ」っと言っこの場を去った。

「はあ…、怖かった」

「ホントな、楽姉は見たことあるけど、小野寺が怒ったのは初めて見たな。あれは怖えな」

千棘と要は、二人が去ったあとしばらく公園のベンチでグツタリしていた。だが、ふと要が気になることがあったのを思い出す。

「なあ千棘。さつき楽姉が言ったみんなって十年前の子達の事？」

「うん。私、あれからずっとアメリカにいたから要と人生初デートできるのが嬉しくて、約束のことすっかり忘れてた」

そう軽々と甘いことばを言わないでくれ。恥ずかしくなるだろ。

「ま、まあ、これから気をつけていこうか。あんな状態にはもうなりたくないからね」

「そうだね、じゃあ要。今日はこれで帰るね」

「わかった。あ、でも、時間も時間だし送ってくよ」

「大丈夫だよ？」

「いいのいいの。さあいこう！」

要は現時刻が六時を指していた。俺は千棘を家まで送っていった。

## ツギノヒ

デートの後、千棘を家まで送っていった。その時、クロードに睨まれたがそれ以上はなく俺も家に帰った。

家に帰った後、十年前のことがあやふやで思い出そうと努力したが、はじめてのデートで疲れたのかそのまま寝てしまった。

―次の日―

ピピピピツ　ピピピピツ　ピピガチャツ

「ふおあゝ。寝てたか」

要が目を覚ます。

「要〜！〜飯だよ〜！」

楽が朝食を作り終えたよう呼びかけてきた。

「今行く〜！」

要は楽の料亭並の朝食を食べ、いつも通りの支度をして、一緒に行く楽を玄関で待っていた。すると、

「ご、ごめんくださいーいー！」

要の目の前の扉から知っている女性の声が聞こえた。

ちょうど玄関にいた要が扉を開けるとそこにいたのは、千棘と鋭い視線を向けるクロードであった。

「千棘？どうしたの？こんな朝早くに…！」

要は薄々感づいてはいたが聞いてみると、

「あ、おはよう…要。つ、付き合ってるんだから一緒に学校に行くのは普通でしょ？！」

千棘は頬を朱に染めながら言った。その顔に要はノックアウトされかけたがギリギリで耐え、

「た、確かにそうだな。それじゃあちよつと待っていてくれ」

楽も準備ができたので出発した三人はクロードと別れ、学校に向かった。途中、要と腕を組んで歩いてきた千棘に対抗し、楽が要の反対の腕に自分の千棘にはないものをグツと押し付けた。それを見た千棘がそれに対抗して、ないものを押し付けたりと夢のような事が起こっていた。要は両手に最高級の花という状況だったので周りから嫉妬と羨望の視線を向けられる羽目となった。

「ちよつと楽さん、その腕を離してくれませんか？要が困ってるんだけど…」

「そつちこそ離せばいいじゃない？ないものを当てられても要は喜ばないよ」

「なにを！」

「ぐぬぬぬ…」

千棘と楽は家から腕を組んで、ずっとこの調子でバチバチ火花を散らし要を奪い合っていた。だが、今は学校の前。要はさすがにきついと思い、

「あの、お二人さん？もう学校なので離れてくれませんかね？」

すると、千棘は楽に意識が向いていて気づいていなかったようで、自分の今までの行動が恥ずかしくなり急いで要から離れる。

「え？はっ！わ、私っ、なっ、なんて恥ずかしいことをして！」

千棘は離れたが、楽は毎日要にしていることなので特に気にせず、さらに千棘を挑発するように、

「ふんっ！、私はいいもん！周りなんて関係ないし」

校門の前でこんなことをしているのでかなりの注目の的であった。嫉妬するもの、呆れるもの、憧れるもの、様々な視線が三人に視線を向けていた。要はさすがに、この注目度なら二人はおとなしくなるだろうと思っていたが、要の予想を外れるどころか悪化してしまったのだった。再び、要の掴まれていないほうの腕に重みを感じる。

「わ、私も周りなんてきかないし…：関係ないもん！」

ムキになって恥ずかしがりながらも腕を離さない千棘とそれにも動揺せずに腕を離さない楽に苦笑いし、周りからの視線を受けながら教室に向かった。

—学校—

さすがに恥ずかしかったのか千棘は教室の手前で腕を離した。ちなみに楽は廊下にいた友達とお話することによってようやく腕を離した。解放された要は千棘と教室に入る。

「おはよう〜」

だが、要が教室に入るといつもと空気と視線が変わっていた。クラス的全員がこちら、俺と千棘にいつもと違った視線を向けていたのだ。

「え？な、なに？」

「な、なんですか？」

すると、クラスの全員を中心にいた集がニヤツとしたと同時に大声で、

「せくの！」

「「おめでと〜〜〜！」」「パンツパンツパンツ

「うあー！」

「きやつー！」

集の掛け声でくす玉が割られ、クラス全員がクラッカーを打ち鳴らした。急なことで要と千棘は困惑した。が、集が発した言葉で理解する。

「いやいや〜、お二人さん！お付き合いされたそうで、おめでと〜〜〜ございます！！」

「え？」

「ちよ、お前なんで知ってたんだよ」

要は集が何故知っているのかわからなかったが、次の一言で納得する。

「は？あんなに堂々と商店街を歩いてたら誰かは見るでしょ」

「あ…」

「確かに…」

「ちなみに私は見た」

「俺も見たよ」

「俺も」

「私達も見たよー」

集とクラスの面々に目撃されたと聞き、何も言えない要と千棘。

「で？そこんところどうなんですか？え？」

集がニヤニヤしながら詮索してくるので千棘にどうしようかと視線を向けた。が、その時要の目に入ったものは千棘ではなく銀髪の美女だった。その美女はもちろんクロードだ。おそらく千棘の護衛だろうが、教室の外にある木の上にいるのはあからさますぎる気がする。しかも双眼鏡で見てるし。そしてさつきから殺気が向けられている気がする。

「あくまあ、付き合ってるよ」

「ちよ…ちよつと要、恥ずかしいから…」

要が折れて自白すると千棘が照れながら要の服の裾を少し引つ張ってきた。なんとも可愛い仕草で要は千棘に見とれてしまった。すると、要と千棘の二人の甘い空間ができてしまい、それにクラス中が一瞬にして飲まれてしまった。現在この教室で動いているのは時間と胸の鼓動だけ。要と千棘は見つめあい、クラスの人はその甘い光景に息を呑んでいた。だが、それを壊す存在がいた。

「はい終わり〜！千棘ちゃんタイム終了ですー！」

楽だ。今まで廊下にいたが、騒ぎを聞いて要の後ろで見ていたら我慢ができなくなつて要を引つ張つて抱きついた。

「うおつて、楽姉ー！」

さつきまで千棘とラブラブしてた上に、学校で人気の楽に抱きつかれる要に、クラスの男子から嫉妬や殺気の視線を向けられる。

「おいおい、朝から元気だなくお前ら。まあイチャイチャしてるのもいいがとりあえず席につけ〜」

「「はーい」」

担任のキョーコちゃんが入ってきたので全員すぐに席につく。こ

れでこの話が終わる……わけなどなく、HRが終わったら、要は男子  
からの嫉妬と怒りの視線を浴び、千棘は女子からの質問の嵐に目を白  
黒して頬を赤くしていた。